



京都府立大学特任教授
松原 齋樹さん

一人ひとりが協力し、個人レベル
でできることを進めていくことが、
社会的に脱炭素を進めることにつな
がる。

我慢することだけが
省エネではない

講演内容



環境を考えるきっかけに 「6月5日環境の日」シンポジウムを開催

6

月5日の「久御山町環境
の日」に合わせ、役場5
階コンベンションホール
でシンポジウムを開催し、約100
人が参加しました。

シンポジウムでは、信貴康孝町長
が「久御山町環境基本条例とまちづ
くり」について町の取組状況を紹介
しました。基調講演では、京都府立
大学特任教授の松原齋樹さんが「脱
炭素社会実現に向けてできること」
と題し、コンパクトな環境都市をめ
ざすための講演を、京都府地球温暖
化防止活動推進センター副センター
長の木原浩貴さんが「脱炭素型のす
てきな久御山町を描く」と題し、先
進地域の事例から学ぶことの講演
をしました。

その後、京都府総合政策環境部地
域政策室参事の池松達人さんをコ
ーディネーターに、信貴町長、松原さ
ん、木原さん、京都機械工具(株)
執行役員の竹内昇さん、久御山町教
育委員の豊田美幸さんが「久御山町
の環境とめざすべき将来像」と「未
来の久御山町を担う子ども達に向け
て」というテーマで、トークセッ
ションを行いました。

問合せ／産業・環境政策課



京都府地球温暖化防止活動推進センター
副センター長 木原 浩貴さん

脱炭素は
すてきな社会のため

脱炭素という「我慢をする」と
いうイメージがある。しかし、世界
では脱炭素ですてきな町を実現して
いるところがたくさんある。

オーストリアは、世界的に脱炭素
で有名で、地産地消のエネルギーで
ゼロエネルギーを実現させているま
ちが多く、民間とまちが協力して実
施することで「住み続けられるまち
づくり」を進めている。

たとえば、地産の電力で動く路面
電車をまち中に走らせ、多くの住民
が路面電車で移動できるようにして
いる。脱炭素を実現し、我慢しない、
すてきなまちづくりを実現させてい
る。

より良い
自然環境の継承と
脱炭素社会の実現へ

01

住民の皆さんに
してもらいたいこと
日常生活の中で環境への負
担低減
(無理のない範囲で少しで
も意識を)

02

事業者の皆さんに
してもらいたいこと
・事業活動に伴う公害防止
と自然環境を適切に保全
する措置の実施
・事業活動における廃棄物
の適正処理

03

町がすること
・基本的・総合的な施策の
策定
・国や他の地方公共団体と
連携し、施策の推進を図
る
■ みなくるタウンに再生可
能エネルギー
■ 歩くまちの推進で脱モビ
リティ
■ まちづくりセンターに省
エネ性能の導入

令和5年4月1日から久御山町環
境基本条例を施行しました。
この条例は、環境政策の基本理念
や方針などを定めた条例で、本町の
良好な自然環境を適切に保全し、将
来の世代に受け継いでいくために住
民・事業者・町がそれぞれの責務の
もと、協力して取り組んでいくこと
を目的としています。

トークセッション

久御山町がめざすべき環境と将来像、未来の久御山町を担う子ども達に
向けて話し合いました。



トークセッションコーディネーター
京都府総合政策環境部地域政策室
参事 池松達人さん

我慢しなくてもよい省エネ活動を
行い、自分事として捉えてこれま
での常識に縛られることなく色々
な人が意見を出し合いながら考
えて行くことが大切。



松原齋樹さん



豊田美幸さん

お互いの信頼関係に基づき、よ
りよく生活が豊かになることを考
え、建設的に話し合っていき、
子どもたちにメッセージを発信し
ていくことが大切。



木原浩貴さん

EUの国々では、住みやすさをを
求めることでSDGsの考え方につ
ながっている。大人から子どもま
で全世代が語り合える場を作る
ことが大切。



信貴康孝町長

まずは、身近な自然を知り、どの
ようにして自然と共存していくの
か次世代を担う子どもたちと一
緒になって考えていきたい。



竹内昇さん

約1600社の町内企業が、まずは、
自社のCO₂の排出量を把握し、
そこから何ができるか考えてい
くことが大切。